

序章

裾野市の遺跡概要

はじめに

本編は、凡例に示したように、裾野市史資料編のうち、原始・古代・中世までの考古資料を収録したものである。考古資料というのは、各時代の人々が住んでいたところ、つまり遺跡や、そこに残された遺構・遺物をとり上げた資料をいい、これを対象にして各時代の文化や生活様式を明らかにする学問を、一般に考古学といっている。この学問は、文字を使って書かれた古文書や古文獻を対象にした学問と併行する歴史学である。

考古学は、その対象とする範囲がたいへん広い。例えば裾野市内にたくさんある石造物を調査して、その種類、形態、分布の在り方や立地の状況を明らかにすることも、考古学の仕事であるが、近世江戸時代のものまでを考古資料として取り上げると、あまりにも種類や数が多くなってしまうので、本編では基礎資料の収録の範囲を中世までとしたのである。

ところで遺跡・遺物は、昔にさかのぼればのぼるほど、現在の地表からその姿が消えてしまっている。この理由や原因には、第一に自然の災害があげられるが、とりわけ裾野市内では富士山や周辺火山の噴火によって埋没してしまっていることが多い。また人の手によって破壊されてしまったものもあるが、まったく失われてしまったのではなく、その一部が土中に残されているのである。このようなところが、後世、なにかの機会に発見されることがある。

例えば静岡県史第一巻の「深良村深良の遺跡」の項によると、「泉村の北に隣接した部落で、嘗つて火山灰に埋没された杉の切株を採集した際、地下数十糧のところから厚手の土器片と磨製石斧とが出た。」という記載がある。この出土した厚手の土器というのは、現在でいう縄文時代に作られた土器であり、磨製石斧というのは、この時代に使われた石の斧である。県史の刊行されたのは、昭和五年（一九三〇）のことであるが、この県史には裾野地域で原始、古代の土中に埋没していた遺跡が九カ所ほど報告されている。

ついで昭和九年（一九三四）、県立（旧制）沼津中学校歴史科が静岡県郷土研究第一輯に発表した、「沼津市駿東郡石器時代及金石併用時代遺跡遺物一覧表」によると、市内の富沢、佐野西原、公文名、茶畑、同浅間神社、深良南堀、同町田山田、桃園など一カ所の遺跡と出土遺物を紹介している。同表によると、大正一〇年（一九二一）の頃には、公文名で打製の石斧三個が採集されている。打製の石斧というのは、石を打ち欠いて斧の形にしたもので、またよく磨いて斧に仕上げたものを磨製石斧という。石器時代とは縄文時代のこと、金石併用時代というのは、弥生時代のことを指している。

戦争中は、一時、この方面の調査研究は停滞を余儀なくされたが、昭和二二年（一九四七）から開始された静岡市登呂遺跡の発掘調査は、敗戦後のきびしい耐乏生活のなかで、考古学の研究に大きな刺激を与え、各地域の遺跡調査が活発となり、多くの新しい遺跡が発見されていた。昭和三〇年代に入ると、日本は著しい経済発展をするともに、各地域の開発が進み、その結果、遺跡の破壊消滅も進行した。これに対処するため、国の文化財保護委員会では、昭和三五年（一九六〇）から全国の遺跡所在地の調査を開始し、この結果、昭和四〇年（一九六五）に作られた静岡県の「埋蔵文化財包蔵地所在地名一覧表」によると、裾野市では一八カ所の遺跡が記載されている。これと相前後して東名高速道路の路線が裾野市内を通過することになり、関係者によって、路線内の遺跡分布の調査が行われたが、市内ではすでに発見されていた金沢上川遺跡が該当し、昭和四二年（一九六七）、市ではじめての発掘調査がおこなわれた。この内容については、本文を参照されたい。

昭和五四年（一九七九）、静岡県教育委員会では、埋蔵文化財保護の基礎資料とするため、「静岡県遺跡地名表」を刊行したが、この地名表に収録された裾野市内の遺跡は、五九カ所にも及んでいる。わずか一〇年あまりの間に四一カ所もの遺跡が新たに収録されたのは、中世の城館跡まで遺跡保護の対象としたためでもあるが、この間の地元の研究者の努力の結果によるところが大きい。

このような中で、裾野市内の開発は著しく進み、住宅・道路・学校・工場・高原都市計画などの建設工事があいついではじまり、昭和四九年（一九七四）から昭和六二年（一九八七）までの間に、茶畑道場山、公文名天神山・屯屋敷、公文名日向・丸山Ⅰ・Ⅱ、千福市場平・小杉平・細野沢・馬場添、深良城ヶ尾・上原、富沢内野山・原、桃園入ノ洞、大畑上屋敷・中屋敷・大畑城跡西曲輪、金沢上川遺跡など二〇カ所にも及ぶ遺跡が発掘調査されたが、これら遺跡の大部分は該当の工事によって消滅してしまった。また、桃園尾畑遺跡のように、貴重な遺物を出したにもかかわらず、十分な調査期間のないまま、宅地造成のため破壊消滅してしまったところもある。しかし、これらの発掘調査の結果、原始、古代から中世に至るまでの、いままで知られていなかった裾野市内の土中に埋もれていた歴史が、次第に明らかとなってきたことも事実である。

それでは、これらの発掘調査によって、どんな事柄がわかってきたのか、以下、概略だけ説明しよう。

第一節 旧石器時代

まえに時代がさかのぼればのぼるほど、遺跡は土中に埋もれてしまっていると述べたが、どのように埋もれているのだろうか。金沢上川遺跡やそのほかの遺跡で、発掘調査によって検出された土層の堆積状態によって説明していこう。くわしくは第一章に図示されたものを参

考にされたい。遺跡によって多少の差はあるが、まず地表に近い第1層は表土層で、有機物を多く含み地表面は草木がよく成育している。開墾されると耕作土となる。この土層は、火山灰が植生によって土となったものと考えてよい。現代から近世の遺物が含まれている。第2層は、粒の細かい火山砂層で、下にいくほど粒が荒くなり、乾くと白っぽくなる。御殿場市の砂沢すざわで検出されたので、「砂沢スコリア」といわれ、約一七〇〇年前に富士山から噴出したものであるとされる。第3層と第4層は、〇・五〜一cmぐらいの、火山ガスの抜けた発泡状の火山砂礫層で、3層は硬く縮まってスコップでは掘ることができない。第5層は、角ばった粒の荒い火山礫層で、発泡はあまりしていない。3層から5層までは、伊豆の天城山や箱根山の噴出物で、「カワゴ平パミス」「仙石スコリア」といわれ、約二八〇〇年前頃に降り積もったものとされている。この3層から5層までの火山砂礫層中からは、いまのところ遺物はほとんど含まれていない。これらの噴出物は、愛鷹山麓や箱根山麓にみられるから、この地域全域にふり積もったと考えてよいが、裾野市の中央部の平地では、流出したり除去されてしまったところもある。

第6層は、黒色の強い有機質の土層で、二八〇〇年以前の地表であるとする。第7層は、6層に連続する土層で、上から下へ黒褐色から暗褐色となり、土層は褐色化していく。この6層と7層からは、多量の縄文土器や石器が発見され、縄文時代の土層といわれている。愛鷹山麓の遺跡では、6層と7層の境目あたりに、鹿児島県奄美郡徳之島のアカホヤ火山が大噴火をして、その時に噴出した火山灰の堆積した土層が検出され、その年代は六三〇〇年前頃であるとされている。一般的にいうと、上部の6層から出土する土器は縄文時代の新しい時期のもので、7層から出土する土層は、縄文時代でも古い時期のものが多く、またアカホヤ火山灰層の下から出土する縄文土器は、六三〇〇年以前のもので、上部から出土するものは、それ以後のものということもできる。

第8層は、明るい粘り気をもった黄褐色土層で、火山灰が長い期間に絶えまなく降り積もってできたものとされており、一般にローム層をいつけた石器が発見されるが、縄文土器は出土しない。このことから、これらの石器が使われた時代を、縄文時代よりも前の時代として、先石器時代といわれていたが、現在では旧石器時代といっている。箱根や愛鷹山の山麓の遺跡で、このローム層を深く掘った発掘調査の結果によると、火山灰や火山礫砂層が何層にも堆積し、その層と層の間に、噴火のないおだやかな期間もあって、植物が生い茂り有機質の黒色土が形成された層がいくつか検出されている。このような黒色土層中から、現在、二八〇〇〇年前の石器が発見されている。

この旧石器時代の石器が日本で初めて発見されたのは、昭和二四年（一九五〇）、群馬県岩宿遺跡のローム層からであるが、その後、この方面の研究が盛んとなり、現在、日本では約三〇〇〇カ所の遺跡が発見されている。このうち静岡県では約一五〇カ所が知られているが、これ

らの遺跡は、天竜川をのぞむ磐田原台地の西側と愛鷹山の東麓から南麓及び箱根山西南麓にかけて集中しており、偏よった特異な分布を示している。裾野市内では、愛鷹山麓の富沢平林、富沢内野山Ⅱ、同尾畑、箱根山麓の公文名丸山Ⅱ、日向、富士山南東麓の上川遺跡の五カ所が知られている。これらの遺跡から出土した石器は、主として黒曜石でつくられたナイフ形石器といわれるもので、長さ五〜三cmの小形の刃器である。そのほかに刺突具に使われたとする小形のモリ状の尖頭器、物を削るために使われた刃器などがあるが、詳しいことは、本文を参照されたい。

現在、上川遺跡より北には旧石器時代の遺跡が発見されていないので、本遺跡は、愛鷹・箱根山麓を中心とする遺跡密集地域の北端にあり、また、裾野市内の遺跡は、その周辺部に位置するといえよう。ただこの分布状況は、現在の地形から遺跡分布を見たものであるが、旧石器時代は、いまの富士山はその姿を形成中で、愛鷹山と箱根山との間は、なだらかな尾根末端の丘陵が延びていて、その境目は溪流が北から南へ流れていたと考えられる。上川遺跡周辺の馬ノ背状の丘陵も、東南方向に延びてこれと接していた。古富士山は約一二〇〇〇年前頃からはげしい噴火活動をはじめ、噴出した大量の溶岩は、愛鷹山と箱根山の間を流れ下って、その先端は三島駅南の楽寿園まで達し、その後、表面の低いところは土石流で埋めつくされ、約一〇〇〇〇年前には現在とほぼ同じ地形ができたという。したがって溶岩で埋没してしまったところにも、旧石器時代の遺跡があった可能性もあるが、いまは尋ねるよしもない。しかし、深良の高雄山やその続きの陣山、千福の平山、茶畑の道場山などは、溶岩流に埋め残された丘陵であるから、この時代の遺跡が発見される可能性はあるといえよう。本文中の年代は、日本で広く用いられている放射性炭素年代測定法で測られたもので、これは遺跡のあった土層中から採取した木炭や骨貝殻などに含まれている放射性炭素14の量を測定し、その半減期五五七〇±三〇ないし五七三〇±四〇年を基礎にして算出したものである。

第二節 縄文時代

縄文時代というのは、縄文という縄目の文様のついた土器を造って使用した時代をいう。しかしこれは単に時代を示す名称であって、その内容をいい表したのではない。この時代の、食料を得るための道具とか、生活に必要な刃物、利器のほとんどは石から作った道具、つまり石器であって、縄文時代はまたいいかえれば石器の時代であったのである。

縄文時代はいつ頃始まったかという、日本の旧石器時代の終わり頃、今からおよそ一二〇〇〇年前に、豆粒文とか隆起線文、爪形の文

様を施した土器が、旧石器時代最末期に作られた細石器（二～三cm前後の石刃）や有舌尖頭器と一緒に出土することから、この種の土器をもって、いまは縄文時代の始まりとし、この時期を縄文時代の草創期と呼んでいる。以後、縄文時代は土器の文様とか形態などの変化の移り変わりを基準にして、約九〇〇〇～六〇〇〇年前までを早期、約六〇〇〇～五〇〇〇年前までを前期、約五〇〇〇～四〇〇〇年前までを中期、約四〇〇〇～三〇〇〇年前までを後期、約三〇〇〇～二二〇〇年前までを晩期と区分して、時期の移り変わりや地域的な土器の相違などを明らかにしようとしている。

ところで裾野市内の縄文時代遺跡は、第一節で触れたように、富士山や愛鷹山、箱根山麓のローム層の上に形成された黒褐色土層中において、その上にまたおおいかぶさっている火山砂礫層を除去しないと発見できない。山麓の開発が進んだのは明治時代以後であって、やがて「マサ抜き」という作物に邪魔で不適当な火山砂礫層の除去が行われたり、また「イモ」を貯蔵するため畑の隅を深く掘ると、遺跡であれば土器や石器が出てくることもある。市内の遺跡の大部分は、火山砂礫層が除去されたところで発見されたものであって、その数は四一カ所ほどあり、分布状況を見ると、ほとんどは箱根・愛鷹山麓に集中し、そのほか六カ所は裾野市北部の富士山東南麓に散在している。この北部に遺跡数の少ないのは、火山砂礫層が厚く堆積していて発見しにくいからではないかと思われる。また市の中央部を占める、富士山溶岩流の露出した地域には、現在のところ遺跡は発見されていない。ただし茶畑道場山遺跡は、もともと箱根外輪山の山麓の丘陵であったのが、富士山の溶岩流で鞍部の低いところが埋没して独立丘になったものと考えられるから、箱根山麓の遺跡群に入れてよいと思われる。これら遺跡の立地するところは、山麓丘陵の沢谷を望む、比較的広い平坦地の南方向に開けた、ゆるい傾斜面にあって、当時の生活様式の一端を示している。

地域的に遺跡分布の在り方をみると、県東部の富士川ふじがわ以東では、沼津市・長泉町の愛鷹山麓と三島市の箱根山南西麓に集中しており、裾野市の場合には旧石器時代の遺跡分布と同じように、その周辺部に該当しているとしてよからう。県下全体の遺跡分布からいっても、富士川以東が圧倒的に多くて、さらにこの愛鷹・箱根山麓の集中度の高いことは特異な在り方を示している。

縄文時代は初めに述べたように、五つの時期にわけられているが、その時期別の遺跡立地数をみていくと、金沢上川遺跡出土の剝片石器・搔器・尖頭器（第一章 旧石器時代の項参照）が草創期のものと思われるだけで、それ以外は確実な土器を出土した遺跡がないので明らかでない。ただ深良城ケ尾、桃園尾畑、千福細野沢遺跡に有舌尖頭器が出土しているので、草創期遺跡のあった可能性はあると考えられる。早期の遺跡は、市内の縄文時代遺跡の大部分を占めている。このことは、どの遺跡の出土土器片をみても、かならずといってよいくらい早期土器片が混在していることかからいえるのであって、後の時期の遺跡が早期の遺跡と重なっていることをも示している。早期は期間が

長いので、土器によって前半と後半に分けられているが、そのなかでも後半に属する土器片を出土する遺跡が多い。いずれにせよこのことによって早期のころに、市内の縄文時代遺跡の立地の在り方が決まってしまったといつてよからう。また市内の各遺跡は、早期から後の時期と順序よく重複して営まれたというのではなく、次の前期で終わってしまったたり、前期がなく早期の後に断絶があって中期に移るといふように、重複の様相は遺跡ごとに異なっている。また同じ時期でも、土器の移り変わりに空白の期間があり、これらのことによつて無住の時期があった事を示している。なんといつても一万年近い時間的な経過があるので、継続的に遺跡が営まれたというよりも、ある時期、その時点に移り住んだものと、とらえた方がよいのではないかと思れる。また、市内では、早期以後に成立した遺跡は少ないともいえる。全体的にみると、早期以後の遺跡数は減少していく傾向にあり、特に中期では茶畑道場山、公文名屯屋敷、桃園尾畑、田場沢裏山、柳島、金沢上川遺跡といったような遺跡に集中し限定されてくる。また中期になって下和田一本杉下とか御宿新田、中里、坂下遺跡といった、富士山東南麓に立地する遺跡が成立する。中期以後、遺跡数は特に激減してしまい、愛鷹山麓側の葛山田場沢裏山、同一色原、同中里、同下条、富沢内野山 I 以外には見当たらず、土器量も極めて少ない。晩期の遺跡は、現在のところ確認されていない。

次に遺跡の規模についてみると、本文の各遺跡ごとの地図の上に、その範囲をスクリーン（ぼかし）で表したが、これは土器片の出土範囲または散布範囲を示したものである。ところが採集した土器片を整理してみると、五〇〇年とか一〇〇〇年、時には二〇〇〇年という長い時間の間隔を置いた各時期の土器片が入り混じっていて、このことから示した遺跡範囲は、或る特定の時期の遺跡範囲を示したものであるのではないのである。そのなかで早期土器片のうち前半期のもは、極めて数量が少なく、遺跡によってはわずかに一〜二片というものもある。このことは遺跡の規模が小さいことを示していると考えてよからう。しかし早期後半から前期になると、金沢上川、千福細野沢遺跡でみられたように、遺跡範囲は狭長な尾根稜部の平坦地全面を占めるようになり、規模も拡大されてくる。中期遺跡になると、茶畑道場山、公文名屯屋敷、桃園尾畑遺跡のように尾根丘陵上の広い平坦地に立地し、遺跡範囲も広く、出土の土器量も飛躍的に多くなる。後期、晩期については、先にふれたように資料がわずかで、遺跡の実態は現在のところ不明である。

以上、裾野市内と限定すれば、後期のある時点で縄文時代は終わりをづけ、無人の空白期に入る。この原因や理由については、縄文時代の遺物を含む土層の上に、二八〇〇年前頃からの火山砂礫層が堆積していること、また気候が寒冷化して、縄文時代の生産手段では対応できなくなったのではないかと考えられている。

第三節 弥生時代

弥生時代というのは、紀元前三世紀の頃から紀元三世紀頃までの約六〇〇年間の、日本で初めて水稲農耕が開始された時代を指している。この水稲農耕を生活の基盤とするなかから生みだされた、物質的、精神的な総合的な所産を、一般に弥生文化といっている。

もともと水稲農耕（米作り）は、アジア大陸の東南部で始まったが、それが紀元前三世紀の頃に西日本の北九州に、稲作人と共に渡来し、やがて瀬戸内海沿岸、山陰、畿内を経て伊勢湾周辺まで水稲農耕が伝播した紀元前二世紀頃までの期間を、弥生時代の前期としている。近年の発掘調査の結果では、日本海沿岸を北上して青森県まで伝わっていったとする。畿内で成熟した弥生時代の文化は、紀元前一世紀代になると、太平洋沿岸を経て東北地方仙台平野や中部地方の内陸部まで伝播するが、この時期を弥生時代中期といっている。以後、日本列島の全域に水稲農耕が浸透していった時代を後期としているのである。やがて紀元三世紀代に入ると、それぞれの地域を支配する首長（王）が現れ、巨大な首長墓（古墳）を築く時代となって、弥生時代は終わりを告げる。

ところで裾野市内の弥生時代の遺跡は、現在のところ極めて少なく、遺物も数えるほどしかない。このうち箱根山麓の公文名丸山Ⅰ遺跡と、黄瀬川東岸の佐野二本松下遺跡から、条痕文系土器といわれる弥生土器片が極めて少量出土しており、弥生時代幕開きの痕跡を示している。条痕文系土器というのは、紀元前二世紀の頃、愛知県の三河地方まで水稲農耕が伝わってきた時に、それと接触した縄文時代晚期最終末の文化をもつ人々が作り出した土器であるという。この土器は赤貝のようなギザギザのついた貝殻で、壺や甕、深鉢形の土器の全面に斜、横、山形の凹凸のある平行の条線、つまり条痕という特徴のある整形文様を施してある。やがてこの土器は、天竜川流域を遡って北信濃に伝わり、北関東から東北地方南部まで、また東へは静岡県から神奈川県、伊豆七島まで点々と分布している。北進や東進のなかで、施文具は貝殻から荒い櫛歯状の施文具による条痕に変化している。裾野市内から出土したこの条痕文系土器は後者の櫛歯状施文具くしげじょうせんもんぐによる条痕文系土器で、弥生時代中期初め頃のものと思われる。これとよく似た条痕文系土器が隣接する長泉町南一色の大平遺跡から、破片ではなく完形品として出土している。（用語解説参照）

富沢原遺跡というところは、富沢集落より東の一段下った黄瀬川沿いに立地する遺跡であるが、ここから弥生時代の終わり頃の壺形土器が一個体出土している。遺構はなく遺跡の状況も不明である。そのほか御宿宮原出土と伝えられる土器片が二片あって、破片からもとの形を復原すると、口縁部のくびれた深鉢形土器となる。櫛歯状施文具による波状文と、それを横に押しきした簾状文が施され、文様の特徴から弥生時代後期のものと思われる。この土器は長野県や山梨県の後期弥生土器にみられる文様とよく似ている。出土地点が不明なのは惜し

まれる。このほか弥生時代の遺物として、富沢細山と大畑上屋敷から、有孔磨製石鏃がそれぞれ単独で三点ほど出土している。遺跡の状況は明らかでない。

ともかく裾野市内で弥生時代の遺跡が僅少である理由は、二八〇〇年前のカワゴ平・仙石火山砂礫層の噴出や、一七〇〇年前の砂沢火山砂礫層の噴出があって、水稲農耕を営むには不適當となったためではないかと思われる。

第四節 古墳時代

古墳というのは、紀元三世紀代の後半から七世紀代の末ないし八世紀の初め頃まで、土を高く盛り上げて墳丘（封土ともいう）をつくり、内部に遺骸や副葬品を埋葬する施設をもった墓をいい、この古墳を造営した時代を考古学の上で古墳時代といっている。この頃になると文字による記録や文献も残されるようになり、一般的にいう歴史時代に入ってくる。この記録や文献によって日本の歴史の上で、飛鳥時代とか奈良時代といわれる時代と、古墳時代は重複していることに留意していただきたい。例えば壁画で有名になった奈良県の高松塚古墳や、豪華な副葬品が出土した藤ノ木古墳が誰の墓であるのか問題となるのは、その時点での文献があるからであって、古墳時代は文献史学との接点にあり、比較対照が重要な課題ともなっている。

古墳時代は、三世紀後半から、地方によっては七世紀代まで、長さが五〇m以上もある大規模な古墳が築かれた時期と、六世紀代から八世紀初め頃まで、直径がせいぜい大きくても二〇m前後の墳丘をもった円墳で、内部に石を組んで石室をつくり、一方に入口を設けた横穴式石室という構造をした古墳が造営された時期に大きくわけられる。この後半の時期につくられた小形の円墳は、単独でつくられていることはほとんどなく、多くは一〇基とか二〇基とかある一定の場所に群をなしてつくられているので、群集墳と呼んでいる。この群集墳は地表にあって目に見えるので「塚」と呼ばれ、昔から人々の関心を集めていた遺跡であった。たとえば隣接の長泉町には上土狩から南の本宿まで、多くの小形円墳群が築かれていて、古くから「土狩五百塚」といわれていた。近年の数度にわたる発掘調査の結果では、内部に横穴式石室があり、この中から直刀とその付属品、鉄鏃、くつわ等の武器や馬具類、金・銀鐙の耳飾り、玉類の装身具、土師器、須恵器の供献用具などが出土して、六世紀後半から七世紀代に造営されたものであることが判明している。

裾野市内では、この後半の時期に該当する小形の円墳が、深良原に上丹古墳といわれて一基、茶畑中丸に宮方塚といわれる中丸二号墳の一基とあわせて二基が残存している。なお麦塚と富沢の南端に、古墳ではないかと思われるものが一基ずつあるが、疑問の点もあるので本

文には収録しなかった。静岡県史第一巻によると、昭和三年（二五八）、茶畑中丸二号墳の南と北に、それぞれ一基ずつあったが畑地開墾のため破壊されてしまったという。なお中丸二号墳の東一〇〇mのところにも一基あったが、古く破壊され古墳に使われた三個の大石が残されていたので三ツ石古墳といわれているとある。また上丹古墳の北東側にも一基の古墳があったと伝えられている。江戸時代後期に刊行された「駿河記」によると、茶畑村の項に「十三塚」とあって、古い塚があり、これは南北朝時代（一四世紀）の頃の、官軍（南朝方）の戦死者の墓としている。しかし記述された内容を検討すると麦塚や茶畑に、十三塚といわれるような群集墳のあったことがわかる。

このほか裾野市内では、須山滝ノ沢と佐野柳畑からあわせて二本の蕨手刀（口絵参照）が出土している。蕨手刀というのは、柄の先端がワラビの芽のように渦巻き状になっているもので、身幅があって重が厚く、刀身の短い刀剣で、七世紀代から九世紀代にかけて、中部地方から北海道の東日本に広く分布しており、小形の円墳や集落跡から発見されている。滝ノ沢と柳畑出土のものはたまたま発見されたというもので、古墳に埋葬されたものかどうか明らかでない。また、この二本の蕨手刀は東海地方では、その分布の南端に位置している。

古墳以外の遺跡を示す遺物に、この時代に作られ広く使われた土師器と須恵器という二種類の焼物がある。土師器は、弥生土器の伝統を引き継いで作られた土器で、三世紀後半から一一世紀頃まで使われている。須恵器は、五世紀代から一〇世紀頃まで使われた硬質の焼物で、釉薬が掛けられていないので、一般の陶器とは区別されている。土師器も須恵器も日常用具のほか、祭祀用、埋葬用の供献具として用いられ、古墳のほか当時の集落跡、祭祀跡などから多量に出土する。（用語解説参照）

裾野市内では、古墳とは別に土師器や須恵器が出土する遺跡が一六カ所ほど発見されている。このうち茶畑道場山、公文名屯屋敷、葛山一色原遺跡から出土した土師器は、弥生時代後期の伝統を引くもので、この時期になってようやく箱根山麓や愛鷹山麓に人々が移り住んだ痕跡を示している。そのほか「茶畑の十三塚」を中心に、滝頭、中丸、平松、二本松、二ツ屋、麦塚などに、土師器・須恵器の散布地点があるが、集落跡というよりは古墳のあったことを示すものであろうと思われる。また水窪の高田から須恵器が一個単独で発見されているが、出土状況から古墳跡であったらしい。さらに深良カラウト、同西原台、同松葉、同町田、茶畑平松、天理町あたりに土師器・須恵器破片が散布しているというが、採集された破片は小さくて時期の判断が難しい。これらの出土地点に歴史時代の深良上原遺跡を加えると、約六〇〇mおきに連なっていて、古代足柄路の通過地点に沿った位置にあると考えられるが、一応ここでは古墳時代遺跡のなかに入れておいた。

以上、裾野市内の古墳時代遺跡は、ようやくこの地域に人々の定着が始まり、やがて古墳の造営もできるような状況になっていったことを示している。

第五節 歴史時代

本編で取り扱った歴史時代遺跡は、およそ九世紀の平安時代から一六世紀の戦国時代末までのもので、一六カ所ほどであるが、このうち一部の遺跡は古墳時代遺跡と重複している。このうちわけは九世紀代の遺跡は集落跡が一カ所で、それ以外は中世の城館跡が一二カ所で、庄倒的に多く、ほかに一二世紀後半の経塚一カ所と一三世紀代後半のものと思われる鏡面出土地一カ所、一五世紀ないし一六世紀代と思われる古銭出土地一カ所である。大部分の遺跡は、現在の地表下に埋没しているが、城館跡は遺跡の規模も大きく、遺構も地表に残されていて目につきやすい。裾野市御宿の湯山芳健家所蔵、慶安三年（一六五〇）、大畑村他五ヶ村山林・古跡・用水等書上の文書によると、「（前略す）千福村 一 同村古城東西百八拾間、南北へ百貳拾間、東西南三方ハ川、北ハからほり大手の口ハ南からほり壱重御座候 是ハ小田原氏（重）様之衆松田入道のお取たてニ而御座候（中略す）葛山村 一 同村古城ハ鎌倉之御代より甲州之しんけん様御代迄葛山殿と申御城代御座候 其後九拾年以前ニ落居致候、西北ハからほり壱重、東ハからほり二重、大手ハ南水ほりニ御座候、（後略す）」（裾野市史第六卷 資料編 深良用水所収）とあって、千福・葛山城跡のことが、既に近世初期の頃に古城跡として報告されている。

ところで裾野市内では、九世紀代の遺跡としては深良上原遺跡が、現在の水田下の浅いところから発見されている。深良の上原というところは、北から南へゆるい傾斜をもった平坦地が広がる地域で、この平坦面には舌状に張り出した微高地が連続し、灌漑用水路が網の目のようにつくられて、水田と畑と集落が展開している地域である。遺跡は、この平坦面の舌状に張り出した台状の微高地に立地し、地名の上原といわれる地形によく合っている。たまたま深良と千福を結ぶ道路の建設工事中に、現在の水田面を掘削したところ、粘土で固め屋外に煙を出すための煙道のあるカマドをもった竪穴式住居跡が発見され、「十」とか「十一」と墨で書いたように見える、いわゆる墨書土器（ぞくしどぎ）が出土した。土器の特徴から九世紀代のものと判断されたが、墨書土器というのは、当時の官庁や宮殿跡、寺院跡またはそれらの周辺にある集落跡から出土することの多いもので、裾野市の古代を解く重要な手掛かりとなっている。特に遺跡の位置は、古代足柄路の通過地点と思われるところに当たっていることも注目されている。

大畑遺跡は、中世の古城跡の大畑城南直下にあつて、殿屋敷・上屋敷・中屋敷・下屋敷という地名の連続する一角に位置している。多くの城郭研究者は大畑城跡について、一五世紀ないし一六世紀代にかけて、中世の豪族葛山氏が勢力を拡大していくなかで築城されたもので、各屋敷地名は大畑城を経営した葛山氏の一族または重臣たちの居住したところであると見ていた。ところが昭和五九年（一九八四）、国道二四六号建設工事に伴って上屋敷西側部分が発掘調査されたところ、主として一一世紀代の工房址と判断された竪穴、一二世紀から一三世紀代の

大規模な掘立柱建造物、多数の小鍛冶址、領主級の方形集石墓などが検出され、遺物にかわらけ、鉄製品、陶磁類、石製品等が出土した。陶磁類には南宋から元初の中国産の白磁・青白磁・青磁片が多くあって、香合・皿・鉢・碗・四耳壺・瓜形壺などの優品と確認されている。このことから大畑遺跡は、城郭研究者の解釈とは違った遺跡として注目されている。特に遺物のなかで祭祀に使われた鉄人形てつひとがたは、県下ではじめての出土品である。遺跡の歴史的な背景は不明であり、その性格は今後の大きな課題となっている。大畑には上屋敷に隣接した古城跡(地名)に、一二世紀後半に造営された経塚があり、遺跡との深い関連性のあることを示唆している。

鎌倉時代の遺物として、富沢から一三世紀後半のものと思われる菊花双雀文のある鏡が一面出土しているが、遺跡の性格は明らかでない。銭貨が土の中に埋められていたという埋蔵銭の例は全国的にあるが、裾野市内でも愛鷹山のふところに抱かれた、今里中村の浄土院とその付近から、数千枚の古銭が出土している。出土銭の中に永楽通宝があるので、一五世紀から一六世紀代の埋蔵と思われるが、その埋蔵された背景や理由については明らかでない。

裾野市内の城郭跡は、愛鷹山麓や箱根山麓の尾根の末端や中央部へはり出した独丘陵の要害の地に立地されている。しかし「葛山かくし砦」だけは、葛山の愛鷹山中にあって、特殊な立地の在り方をしている。このなかで葛山城跡、千福城跡、大畑城跡は、居館跡と一体となっており、中世的様式をよく示している。これらの城郭跡には、空堀、堀切、縦堀、土塁、門址、郭址などの、それとわかる城郭遺構がよく残っている。深良南堀の興禅寺西側裏山を陣山といい、この丘陵頂部平坦面に土塁の一部が残存し、丘陵をめぐって郭状の遺構があるが、これを城郭跡とするには若干の疑問点がある。ここより北東の箱根山麓の丘陵上に城ケ尾というところがあり、中世大森氏の城跡といわれており、市立深良中学校の建設に伴い発掘調査がおこなわれた。この結果、城ケ尾丘陵上の平坦部南半分を区切っている浅い空堀と、その内側に土塁状の遺構が検出されたが、これを城郭跡とするには遺構が単純で不明な点が多い。このほか地名だけで遺構のないものとして、茶畑城山、金沢手城山がある。

居館跡として遺構が残されているものに、葛山中村の葛山居館跡と茶畑境川の柏木屋敷・麦塚の勝俣屋敷の三カ所がある。共に平坦地に立地しているが、柏木屋敷は沖積低地にあって、東側を流れる境川の洪水を受けやすい位置にある。それぞれ方一〇〇m前後の規模があるが、勝俣屋敷はやや南東側が不整形である。葛山居館跡は半田・萩田・岡村屋敷と連続しており、半田屋敷には土塁も残存し、いわゆる連郭式の居館跡であるが、柏木・勝俣屋敷は単郭の居館跡である。深良原の上丹屋敷というのは、ここを流れる深良川(古川)の迂曲部に立地する。昭和一〇年代の初め頃、静岡県内の城郭研究をおこなっていた旧制県立静岡中学校教諭の沼館愛三が、ここを中世の豪族大森氏居館跡として、静岡県郷土研究第九輯に発表したものである。その後、昭和四〇年代末から昭和五〇年代にかけて、城郭研究家の関口宏行、

伊禮正雄らが現地を調査して、静岡県史第一巻に報告されている「上丹古墳」を、本居館跡の土塁の残存したものとし、方約一〇〇mの単郭の居館であるとした。本編ではこうした経緯があるため一応歴史時代遺跡の項に収録したが、古墳を土塁址とするには、その位置にややずれがある。このほか屋敷地に面して「前田」という地名をもつ、中世土豪屋敷の形態を示すものが数カ所あるが、考古資料の対象となる遺構・遺物がないので、本編には収録しなかった。

第六節 石造物

ここでいう石造物というのは、それぞれの地域の人々が造立した記念碑であって、風化しにくい石を使用し長く後世に残したいという意志を示しており、宗教上や信仰上のものが最も多い。裾野市内では石造物の分布や数の上からいうと、近世以後のものが圧倒的に多いが、中世になると数も少なく、種類や分布もいちじるしく限定され、収録したのは五輪塔と宝篋印塔だけである。これ以外の石造物として、桃園定輪寺の境内に、無縫状の自然石に「天文二十一年」（二五二）の刻銘があったので収録した。

裾野市内の五輪塔と宝篋印塔の分布状況を見ると、若干の相違がみられる。まず五輪塔は、完形のもの、一石でつくった頂部空輪・風輪以下の火輪・水輪等の残存するものを含めて、水窪高田、同長教寺内とその付近、公文名光明寺、久根前之田、同観音堂、大畑、葛山などに、単独に散在するものがあり、路傍に多い。水窪の南に接する長泉町納米里の、御厨道みくりやみちといわれる路傍に、「奉造立五輪者從東西六十六所巡礼往還旅宿之供養刻彫茲諸天洞鑿二科究意己 文亀元年辛酉六月 日 俊盛敬白」と刻銘した、一六世紀初頭の大きな五輪供養塔が一基ある。この一例だけで市内の路傍にある五輪塔を供養塔とみるわけにはいかないが、観音信仰上の造立とみてよいものもあるのではなからうか。なお納米里の文亀元年（二五〇）銘五輪供養塔の形態は、葛山仙年寺開基と伝えられる五輪塔によく似て巨大である。

五輪塔にたいして宝篋印塔は、五輪塔と共に一カ所に集合して各地区に群在し、単独なものは葛山上城に一基あるだけである。公文名五輪塔・宝篋印塔群は、既に「駿河記」（前出）にも記載されているものであるが、すべて石塔がばらばらになったものを集めて積み直したと思われるもので、一基の石塔に両者が入り混じっているものが多く、また欠落部分のあるものもあって、塔身の造作が大きく、原型は大型のものであったと考えられる。深良興禅寺の墓地入口付近にある五輪塔、宝篋印塔も完全なものは、それぞれ各一基で、それ以外は石塔の残部をよせ集めてある。うち宝篋印塔は開山と刻してある。深良和田の五輪塔、宝篋印塔群は、ほぼ完形で一群をなし、形態もよく整っているが、いずれも小型である。これは切久保区にあったものを現在の場所へ集めたと伝えられている。中世の豪族大森氏の墓という説もある。

佐野蓮光寺の五輪塔、宝篋印塔も一群となっており、これも形態が整い小型である。葛山仙年寺境内の五輪塔、宝篋印塔の一群は、葛山氏歴代の墓といわれている。ほぼ完形で形態もよく整っているが、中央の五輪塔以外は、いずれも小型である。この宝篋印塔のなかに、「為蓮修造立供養所也道源、康応元年十月、十五日敬白」等の刻銘があり、時代的な形態を知る上の手掛かりとなっている。葛山上城の宝篋印塔は、一見すると完形のようにであるが、塔身と基礎が合わず、相輪部が欠けている。なお付近にある二基の石塔は、五輪塔と宝篋印塔の各部位をいくつか組合わせたものである。このうち勝又一宅のものには「妙祥禪門 康応元年六月五日」の刻銘があり、金石文としては、葛山氏墓地のものと共に貴重なものである。

以上、旧石器時代から中世末までの遺跡の在り方や移り変わり、またその性格について、大まかな概要を述べてきたのであるが、この資料集に集録された遺跡の大部分は、本文に記述されているように、現在、遺物と記録だけで、何等かの建設工事等によって破壊され消滅している。したがって、かろうじて現存する各時代の遺跡は、裾野市にとって大切な文化遺産といっているのではないのである。

このなかで墳丘のある古墳とか、遺構の顕著に残る城館跡などは、目に見えるしその由緒もわかっている場合が多いので保存され易いが、土中に埋没している遺跡は珍しい遺物でも出土しない限り、人々の関心が極めて薄いというのが現状である。特にその場所が個人の所有地で畑や水田であった場合、市街化調整区域でない限り、なしくずしに他に転用されて遺跡が調査されないまま消滅していくことが多いし、またそれ以外に企業誘致や建設工事等によって、遺跡が大規模に破壊されてしまうという危機にさらされている。

こうした事態は、止むを得ない現実の姿であるといってしまうまでもであるが、特に地域においては、文書や文献のほかに、大畑遺跡上屋敷地区のように、遺跡・遺物が物語る歴史が重要な位置を占める場合が多いことも、深く認めないわけにはいかないのである。そうした意味で、この考古資料集は単に失われた遺跡の紹介だけではなくて、市史の編纂をしていく上で大切な役割をはたすものと考えている。なお、参考・引用した資料・文献は、本巻末尾に記載した。